

3563 地球のかおり 「牛のおなら」(産経新聞)：状況と心模様

ニュージーランド、北東の最先端、レインガ岬をめざした。夜明けの出来事。
南島のクライストチャーチから出発。最南端のインバーカーギルからサウスランドへ。
そして、南島ウエストランドに沿って北上。
ピクトンからフェリーで、北島、風の強いウエリントンへ。

この旅も相当な時間が経過している。慣れもあり、気持ちの余裕もある。
朝礼改暮、NZ 関係の資料が一杯出てきた。概算合計すると、滞在は延べ7ヶ月以上になる。
オークランドで英気も養い、洒落たカウンターバーでの知人との出会い、
北島の有難い情報も得られた。

都会と秘境、このギャップが面白い。後半の旅のスタート。
まず、北島最先端のレインガ岬をめざした。復路、右に左に道草すれば良い。
最北端から北島の南下を楽しむ取材行脚。時間も充分ある。
北島のノースランド、オークランドの辺りから細長い半島となり、
300 キロ以上も北に伸びている。その最先端が、レインガ岬。気候温暖、海岸線も美しい。
途中、魅力ある出会いもあったものの、最小限にとどめ、レインガ岬へ。

南太平洋のタヒチ方面から、大型のカヌーをあやつってやって来た、マオリ族が、
この地に居を構え、独自の文化を育んだとある。
大航海時代、クック船長が上陸したのもこのノースランド。
人を惹きつける定めや魅力があるのかもしれない。
夢とロマン、気候温暖の地。あらゆる種類の果物が、たわわに実る土地。期待が膨らむ。

レインガ岬、近辺には宿はなさそう。情報を詳しく調べない。
先入観や固定概念を持たない旅のスタイル。何しろ旅立つと、1～2ヶ月は滞在。
実に気分的に解放される。自由。これが何よりも有難い。しかし、緊張感はある。
地図上でこの辺りに泊まれば、何とか、早朝には尋ねられるだろうというポジション。
しかし、まだ、かなりの距離があった。

いつものように、朝駆け。暗いうちから出かけた。真っ暗だった。
どのあたりまで来たのだろう。闇に、少し光が差しできてしまった。
レイнга岬の夜明けには、間に合わない。予想以上に時間がかかってしまった。
あたりに家も見当たらない。街の灯りもない。
森や林の中に住人がいるのだろう。無人のような雰囲気の間が続く。

早朝というより、夜中にスタート。いずれにしても一呼吸。車外に出て、一休み。
美味しい空気を吸うことにした。しばし、休憩という次第。
昨日買っておいいたパンでも口にしようか。のどもすこし乾いてきている。水分補給。
この時の一口の水は実に美味しい。心身も健康、それが何よりも有難い。

たまたま道の切れ目から、眼下の放牧の光景が目に飛び込んできた。
まだ、うす暗くぼんやりとしている。何があるのか、詳細はわからない。
直感、偶然、好奇心。フットワークのいい久楽くらくが登場。いやはや、我ながら驚く。
セルフコントロールが出来ているのか、いないのか。
車外に出ると、寒暖の差がきついのか、今朝は、かなり肌寒い。
夜明け前が一番冷える。だから、光が美しく、色彩も美しい。しばし、のんびり。
だんだんと夜が明けて来る。ぼんやりと、ぼやけた風情が何とも良い。
日本人の美意識かもしれない。

最初は、何とも言えない田園のかおり、そして、のどかな光景が、明るさと共に現れた。
刻々と変化する自然を観る楽しみは最高！ 鮮明に見えないから想像が膨らむ。
どこかで見たような絵画の光景、フランス・バルビゾン「ミレーの晩鐘」？

眼前の光景は、静寂そのもの。朝霧まりなのか、朝霞かすみなのか、たなびいている。
心がやすらぎ、心が癒いやされる。身も心も落ち着いてくる。
よく見ると、牛の群れだった。このあたりの草は豊富。牛たちは、のびのびと朝食？を。
朝霧で足元は濡れている。ニュージーランドは、危険な動物も草花もないという認識がある。
気持ちが解放されている。霧走る放牧の地。動きのスピードが増してきた。
ある時点から、早くなるのである。このプロセスが実に楽しい。寒さも何のその。
眼前の光景に感動して、心を奪われていた。同じ光景は、二度と見られない。
足元の冷たさも忘れ、立ち尽くした。

素晴らしい感動の自然と関わりは、私には至福の時間。無我夢中。

今、誰もいない。久^く楽、たった一人。

静寂そのもの。風が少し。地球が活動を開始したのかもしれない。

高い位置の霧？が動き始めた。消えていくのか、どこかに移動するのか。

明るさが増してきている。見えないだけなのか。

無数の牛たちが次々と現れてくるような錯覚。時間としては、そう長くない。

その展開は、スローモーションのよう。よそ見をしていると、場面が変わってしまう。

自然のワンマンショー。自然は芸術家。同じ場面がない一期一会のシーン。

突如、ジャーという水の音。実に勢いのいい音。

大きさでなく、その音は長く続いた。音の出る方向に目を向けた。

無粋な話で恐縮。それは、牛のおしっこの瞬間。実に小気味のいいスピード。直球。

実に気持ちよさそう。この作品の手前の右にも、その瞬間が映っている。

そんな時間帯なのか。最初の牛の連鎖反応なのか。

耳をすますと、次々と時間差で・・・のどかな時間が過ぎていく。

みみさわ耳障りではない。むしろ、好ましくさえ思える。

あるセツチン（おトイレ：雪隠）俳句が脳裏に。

「天国は、どこにあるかと尋ねれば、こらえこらえし、ションの出るとき」と。

牛は、さぞかし目を細めているだろう。牛のおしっこが、

こんなに勢いよく、長い時間とは知らなかった。

人間様より身体が大きいのは確かである。牛の胃袋は、4つあると聞く。

爽快そうな牛の様子、こんな目撃や出会い、子供心に戻ったような、楽しい時間だった。

世の中、知らないことが実に多い。これからも鈍感でない、感じる人間でありたい。

気がつかないだけかも。日頃、心の余裕がないだけかもしれない。

日本人が世界に誇れるもの？ 西洋人が認めるものに、日本人の美意識がある。

今も、そうだろうか。環境が人を育む。プライドや素敵な日本語、死語にしたくない。

善悪より、損得が優先の世の中になっているのか。

猿でも反省。またまた、ションも長い、文章も長い。元に戻して。

勢いがすごい。静寂の中なのでより強く感じる。

このションの音で、なんでもない眼前の光景が、思い出深いものになった。

しばらくして、田園のかおりも変わった。

近づきすぎたのか、風下？ 光景も変わった。朝霧？朝霞？は、幻だったのか。

存在していたのか、いないのか。

またまた脱線。複数回訪ねたフランス・バルビゾン。そして「ミレーの晩鐘」

もし絵が書けたらと願ったが、もともと無理なこと。

現場を訪ねた証明として、50歳からカメラを始めたのがきっかけ。

久楽の勝手な造語だが、「フィルムスケッチ」。

その後、寒^す漉^{こう}き純楮和紙にフィルムスケッチを創作することで「夢絵」と命名。

浮世絵—錦え—夢絵、片腹痛いが、北斎—写楽—久楽は、遊び心。

ここまで長くやれるとは思っていなかった夢挑戦。目立たず目立つ。

現実、作品展は、材料費、額代、人件費、会場費、広報、その他、等々、気苦勞も。

光陰矢の如し。今、現実が大切。今となっては、夢絵は昔話。

フィルムスケッチの写真を、勝手ながら、マイペースで楽しむ。

心模様に勝手なことばかり書く。

また、軌道修正。脱皮しない巳年は死ぬという。夢も大切。現実の大切。今、健康最優先。

元に戻して、

ニュージーランド北島、この瞬間の面白さは格別。

夢中で、夢を追いかけ、夢に命とられるかもしれない。それもいい。

夢中になれる今が、一番幸せかも・・・

車に戻ると、靴は朝露に濡れて、草花や土、泥が入り混じってドロドロ。

味噌も糞^{くそ}も一緒ではないが、運が、すこしついていた。たかがワンシーンの思い出。

されど、思いが広がる。久楽は旅人。これから北島の最先端、レインガ岬へ。

ひとときの夢、まぼろし。まぼろしに終わらず、作品が残った。

デフォルメして描く絵画ではない。写生画のような現実の描写。

和紙夢絵にして、アトリエに飾れば幸い。

タイトルは「牛のおなら」で良かったのか。朝霧は、ガスだったのか。

牛のションなのか、今少し、品よく、格好良く、美的なタイトルをつければと、

決めるのに、1週間もかかってしまった。どうも、そんなバイオリズムになっていた。

ひらめきで、一瞬で決まることもある。たかがタイトル、されどタイトル。

牛のいばり。単なる自然現象。寒さと熱で湯気が発生した自然現象？

まさか、そんなの、あり得ない。考えすぎである。

想像するのがなんとも楽しい。

気がつくと、この文章作成が夕暮れになっていた。今日は文章を考える日と割り切って。

今一人の久業くらくが、この辺でと、ストップをかける。

この辺でお開き、牛のションより長くなってしまった。これもご愛嬌。

パソコンをクローズ。

いつものコーヒー店に出かけた。

夢絵作家とは、

世界の風景、情景を和紙に創作。

そんなわけで、夢絵作家と。今では名前が難しく、

検索は、「地球のかおり」「夢絵作家」「クラークゲブルの世界」

そしてQRコード。



ニュージーランド

自然の宝庫

大好きな国の一つ。素敵な思い出をもらった。

紹介されていたキーワード。

中でも、3553夜空の星、画像に残せなかったが、強く印象に残っている。

森 樹 山

氷 湖 海 鳥 星

歩 憩

世界遺産